

私が編集委員の1人だったのは1999年4月から2003年3月まででした。この期間の大きな変化はe-mailが最も一般的な通信手段になったことです。1999年から2001年までは編集委員同士の連絡にはたいてい郵便またはファックスを用いていましたが、2001年以降は連絡にはもっぱらe-mailを利用しました。以下、この時期に編集委員会で取り組んだ仕事について思い出すまに記します。

**投稿規程** 編集委員として最初に提案したのは応募方法の改善でした。委員1年目に審査するようにと渡された論文には応募者の名前が書かれていました。公平な審査のためには名前を伏せておくべきだと提案し、他の編集委員からも支持を得て、現在の投稿規定のように、投稿論文には著者名、謝辞などは記さない、ということになりました。

このほか、古い投稿規程では英語論文の場合タイプライターで作成することを前提として1行「65ストローク」となっていたので、コンピュータ使用を想定して1行「約80ストローク」としました。最近の規定では「約」が削除されて「80ストローク」となっていますが、ワープロソフトで使われている文字はプロポーションなので、行中にI、i、1が多ければ80字を超えてしまいます。規定に曖昧な数字を指定してはならないのであれば、用紙サイズとフォントサイズを指定し、さらに左右の余白はそれぞれ何センチと指定するのがよいと思います。そうすれば、ほとんど死語になった「ストローク」という語の使用を避けることもできます。

英文の投稿規程の作成にも取りかかりましたが、私が委員長のとときにはまとめることができず、柳さよ氏が委員長のとときに成立しました。

**機関誌の略称** 本学会の機関誌 *Studies in Medieval English Language and Literature* の略称はかつては *SMELL* でした。久保内端郎氏が編集委員長だったときの最後の委員会で松田隆美氏から変更するよう提案があり、引き継ぎ事項となりました。2001年に編集委員だった2人の英語母語話者も変更賛成だったので、*SIMELL* [sáimel, sáimʃl] とすることに評議員会で報告し了承されました。

**「掲載可」** 審査結果を応募者に通知する際の区分はかつては「採用」、「再審査(部分的修正)」、「再審査(全体的修正)」、「不採用」の4段階でした。応募論文のなかには、一定以上の水準にあるものの部分的にもう少し詳しく論じてほしい、と判断されるものもあります。そのような論文を「再審査(部分的修正)」に含めるのは応募者への配慮に欠ける憾みがあります。渡辺秀樹氏が「掲載可」という評価を導入し、他の編集委員もそれにならって「再審査(部分的修正)」とするよりはなるべく「掲載可」として応募者に通知するようになりました。この評価分類は現在の編集委員会でも踏襲されているようです。応募者からは、どの程度書きなおせばいいのだろうか、という疑問が出るかもしれません。

**松浪賞の規定** 松浪賞の現在の規定は次のようになっています〔一部のみ抜粋〕。

受賞論文・研究書はその前部〔ママ〕もしくは一部（希望があればその訂正版）を本学会機関誌に掲載する。

対象：a. 当該年度、9月30日までの過去1年間に公刊された研究論文あるいは研究書

b. 当該年度締め切りの本学会機関誌応募論文、投稿規定については上記の一般投稿論文の規定に準ずる。

この規定に従えば、公刊済みの論文も松浪賞の対象なので、極端な場合、他の学会で受賞し他の学会誌に掲載された論文を松浪賞に応募することも可能です。しかし、松浪賞を受賞すれば *SIMELL* に掲載されるのだから、公刊済みの論文を *SIMELL* に投稿するのは二重投稿であり、なにより、投稿論文は「未発表のものであること」という *SIMELL* の投稿規程に違反します。2002年5月の評議員会で既発表の論文は松浪賞の対象から外すことを提案しましたが、承認を得られませんでした。その後、松浪賞に関する小委員会が設けられ、2度にわたって松浪賞に関する改定案が報告されているにもかかわらず、いまだに継続審議中です。1日も早く現規定の欠陥を改善してほしいものです。

**コメント** 編集委員は応募論文がより優れたものになるよう一生懸命コメントを考えるのですが、書き方次第で応募者から「えらっそうに！」と思われる場合があるかもしれません。委員長によっては審査報告を穏やかな文言に書きなおすこともあるようですが、私はそこまで気がまわらなかったのも、不愉快な思いをされた方もいらっしゃるかもしれません。私自身の反省を込めて、編集委員の大事な任務の1つは、たとえ不採用という結果であっても、いいコメントをもらった、応募してよかった、と応募者が納得する審査報告を書くことだと思います。今後も編集委員会が、特に、若い研究者の学問的成長の助けになることを希望します。